

[212]

氏 名（本籍）	樋 口 倫 子（東 京 都）		
学 位 の 種 類	博 士（ヒューマン・ケア科学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4044 号		
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	心因性視覚障害の SAT 療法に関する研究		
主 査	筑波大学教授	保健学博士	宗 像 恒 次
副 査	筑波大学教授	教育学博士	田 上 不二夫
副 査	筑波大学助教授	博士（学術）	橋 本 佐由理
副 査	筑波大学助教授	博士（医学）	野 津 有 司

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 目的

本邦における小児精神保健の現状は悪化をたどっている。従来から小児の心の問題は身体化されやすいことが知られている。本研究でとりあげられる心因性視覚障害（以下 PVD）は、主に矯正視力不良、視野狭窄、色覚異常、近見視力低下など視機能異常を示し、学童期から思春期に生じやすく、小児眼科患者の 1%前後の割合をしめるものと報告されている。本障害の治療は、かつては宗教的な治療がおこなわれ、その後精神分析療法、ブリーフセラピーを用いた家族療法、箱庭療法などの報告もみられるが、治療法のほとんどは、保証やプラセボの眼鏡や点眼薬の処方であり、国内外大きな差はみられない。またそれらによる治癒率は決して高くなく、しかも長期的な予後に関する詳細な研究はほとんど見当たらない。

本研究では、ストレスが身体化した PVD の視覚特性と心理特性の特徴について分析し、その特徴を捉え、その上で SAT 療法（Structured Association TecÚique 療法）を応用した介入効果を長期的に観察し、その結果を明らかにすることを目的としたものである。

2. 方法

研究課題 1 では、PVD の視機能評価として、コントラスト感度測定装置を用い、健常児との比較、成人例との比較、治癒前後と再発時の比較、PVD に対する心理介入（SAT 療法）の前後で比較検討している。研究課題 2 では、ストレスを抱えやすい心理特性、すなわち「自己抑制型行動特性」「対人依存型行動特性」「自己価値感」「情緒的支援認知度」に注目した。自記式質問紙票を用いアプローチである、ストレスを抱えやすい心理特性が、PVD の児やその親に存在するのではないかという仮説のもとに、健常児をコントロール群に設けて比較したものである。研究課題 3 では、PVD の児に対して SAT 療法による心理介入を行い、従来型の治療を施行された症例をコントロール群に設け、その長期的な予後について、前向き調査を行った。治癒から 1 年以上経過を「中期予後」、治癒から 3 年以上経過を「長期予後」と設定して、視機能と自記式質問紙票による心理特性を検討したものである。研究課題 4 では、再発事例と予後良好事例において、児お

および母親の心理特性の変化および面接法による質的データを用い、個人内要因と環境要因について検討をし、研究課題5では、PVDの児とその親の両者に対してのSAT療法での介入による治癒に至る過程を、事例検討している。

3. 結果

研究課題1では、PVDの16例28眼においてコントラスト感度の測定を行い、結果からコントラスト感度は、PVDの鑑別診断や治療効果を評価する上で、有効な検査法であることが示唆された。

研究課題2では、PVD群では健常群に比べ、自己価値感、ソーシャルスキルが有意に低く、自己抑制型行動特性や対人依存型行動特性や特性不安が、有意に高かった。また両親のイメージの悪化が起こっており、両親やきょうだいからの情緒的支援の認知度が、有意に低くなっていた。また本障害の母親の心理特性では、健常児の親に比べて、対人依存型行動特性が有意に高かった。従来報告でも、その親の対人依存度の強さが確認され、このような親子の心理的背景を考慮すると、本障害に対して経過観察のみならず、本人および親に対し積極的な心理介入の必要性が示された。

研究課題3では、SAT療法介入群では、介入直後に改善した自己抑制型行動特性や特性不安は、中期および長期予後のフォローアップ時点で若干の上昇はあるものの、低いまま維持されていた。介入後に上昇した自己価値感や母親に対する情緒的支援認知度は、有意に高いまま維持されていた。

一方、従来型治療の予後良好例では、介入前、直後、フォローアップ時点共、自己抑制型行動特性、自己価値感、特性不安、情緒的支援認知度には、ほとんど変化がみられず、対人依存型行動特性は、むしろ強まるケースも存在した。

研究課題4では、再発例において、自己抑制度や対人依存度の上昇や自己価値感および情緒的支援認知度の低下、特性不安の増悪が確認された。また、児は母親からの影響を強く受けることが明らかになった。予後が良好なケースは、患う子の姿を見て、真剣に受け止めたケースや、母親の危機と重なり、その危機を自分の生き方を再構築することによって乗り越えようとする親の姿勢が明らかとなった。予後が不良なケースは、母親の不安傾向の強さやストレス耐性の弱い行動特性を有するケースであった。母親へのSAT療法が必要なケースの存在があきらかとなった。

研究課題5では、治療過程の検討を行い、児とその親に共通した、「愛されている実感が得られず、甘えや依存を断念し、がんばる自分」という自己イメージスクリプトの存在を捉えることができた。そして、「見えない」という症状は、こうした問題の一角にすぎず根源問題の解決をしない限り、再発やsymptom shiftがおこるものと考えられた。新たな介入モデルでは、イメージスクリプト変更法により、本人が「歓迎された誕生」などのイメージ形成を通し、ポジティブな自己イメージが持てた。さらに親への本技法の適応により、親自身のもつ未解決課題の根本解決が促された。その結果、子への慈愛力の発揮が促進されたことが治癒につながったものと考えられる。

4. 考察

PVDは視機能障害が単一症状ではなく、腹痛、頭痛、喘息などの身体症状、不登校や奇声、爪かみ、自傷行為などの行動症状といった多彩なサインが存在していた。子にとっての、両親の不和や親からの見捨てられるような恐れや怖さは、潜在化されているものの、それが大きく影響しており、症状を呈している本人やその親、その家族、すなわち家族全体を捉えてかかわる視座が必要であった。また身体化された問題には、愛着障害が背景として存在しているので、スキンシップ法や慈愛信号法による非言語的アプローチが重要であり、母親もしくは、心の親が、子の望む方法で、時間をかけてゆっくりとスキンシップ法や慈愛信号法によるコミュニケーションを取る事が重要であった。

本障害へのかかわりとして、SAT 療法でいわれる心の本質的欲求理論を適用すると、3つの心の本質的欲求がバランスよく満たされる体験と、それを通じて得られた報酬系の情動を伴ったイメージや記憶の形成が非常に重要で、特に望まれた妊娠、歓迎された誕生のイメージは、親と子の両者の自己イメージの変化をもたらし、身体化された症状の本当の問題や本当の自分の要求に目を向けて、喜び系の感情の付随する認知と行動様式をとる自分へと再学習の効果がもたらされている。そういった個々人の変化と家族システムの変化が相まって、関係性の良循環を生み、長期的にも効果が持続していった。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、身体化しやすい小児のこころの問題として心因性視覚障害（PVD）をとりあげ、その視覚特性と心理特性の特徴について分析し、イメージスクリプトの変更による治療法である SAT 療法を応用した介入効果を長期的に観察し、その結果を明らかにした初めての研究である。

本研究の意義は、① PVD の視機能を新たな評価指標（コントラスト感度）を確立して、介入結果の客観的評価を長期間実施したことであり、また、②介入結果が単に視機能の改善のみならず、ストレス耐性の高い行動特性への変容を伴っていることを明らかにした初めての研究である。また、③児にとって心理社会的環境である親またはその前の世代に介入する結果、PVD の治癒に至る過程を考察していることである。さらに、④ PVD の再発や治癒を促す個人内要因と環境要因を明らかにしたことである。

これによって、治療困難な小児心身疾患である PVD の治療法の進歩に大きく貢献したことになる。

本研究は、博士論文として一定の水準を満たすものである。またこれらの研究は専門学会誌に掲載され、専門領域においても高く評価されている。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。